

市民による持続可能な地域づくりの試み

——埼玉県小川町に学ぶ——

上條直美

ESDの実践例として、埼玉県小川町におけるフィールドスタディの事例を取り上げた。「持続可能な地域づくりの実践から学ぶフィールドスタディ」では、小川町における有機農業を軸とした循環型地域づくり、歴史・文化・地域循環型経済など多角的な取り組みを通して、人と人、人と自然の共生、持続可能性について体験的に学んだ。持続可能な地域は、同時に人を育てる「地域の教育力」を備えており、ESDの本質が見える。

はじめに

「埼玉県小川町を訪ねるフィールドスタディ」は、立教大学異文化コミュニケーション研究科のリサーチ・ワークショップ集中講義という位置づけで2泊3日の合宿として、2009年から2013年まで5年間、実施された。毎回10名前後の大学院生が参加し、多様な学びが展開された。

小川町という学習フィールド

私と小川町の個人的な出会いは、1990年にさかのぼる。有機農家である金子美登さんは、代々小川町の農家だったが、1971年から有機農業に転換し、日本で最初の有機農業実践家の一人として知られている。当時、金子さんの講演を聞く機会があり、有機農業というものの意味を初めて知り、金子さんの言う「美しい農場」（人と自然の共生）という言葉に心ひかれた。金子さんは苦勞しながらずっと有機農業を守り続けている。

小川町を学習の場として選んだのは、金子さん以外にも、金子さんが育てた有機農家や主婦の人たちとのネットワーク、文化と伝統を継承していこうとする若い後継者、地域のエネルギー循環を考える人、など魅力的な人が多く、人口約3万人の町の中で顔の見える関係でつながり、小川町の中にひとつの見えない「輪(和)」を形成していると感じられたからだ。

自然環境が地域の風土文化を形成するという言葉が文字通り肌で感じられる小川町は、歴史と文化が豊かだ。周囲を外秩父の山々に囲まれ、農林業が栄えた。江戸と秩父の街道の途中にあり、町場として発展し、小川和紙や建具、酒造などの伝統産業が今でもある。こうした地域資源をどうやって持続可能な社会づくりに活かしていくかという取



金子美登さんと田んぼ（撮影：上條直美／以下同）

り組みが、生ごみ資源化事業（家庭の生ごみからバイオガスや液肥をとりだすリサイクル事業）や有機野菜を使ったコミュニティカフェのオープン、地場産の大豆を使った豆腐づくりなど、さまざまな形で少しずつ実現されている。

合宿のねらい

合宿のねらいを考えると、まず参加者がどのような人たちかを知る必要がある。研究科の学生の関心は幅広かった。持続可能な社会への関心という点では一致していたが、農業や地域づくりには未経験の人が多く、フィールドワークの経験も無い人が多かった。そこで、すでにさまざまな取り組みが形になっている小川町から何がしか、持続可能な地域づくりにつながる学びが得られること、というハードルを下げた形でプログラムを組むことにした。

小川町へのエントリーポイントは、NPO生活工房「つばさ・遊」の代表理事である高橋優子さんである。自称、「普通の主婦」だが、決して「普通」ではなく、金子さんらと協働して多様なプロジェクトを展開していた。高橋さんから、学生が学びに来るのだったら、学んだあと具体的な実践につなげて欲しい、という希望もあり、私自身もそのような希望を持っていたが、その点では学習者のニーズと合致させることは難しかった。しかし5年間を振り返ってみれば、結果的には、小川町につながり続けている学生や、農を主体とした活動に関わっている学生など複数おり、学びを行動につなげるという役割は何らかの形で果たしてきたのではないと思う。

2泊3日のプログラムの骨子は、①NPO生活工房「つばさ・遊」の活動のお話（コミュニティカフェで地場産有機野菜を使った料理を提供していること、日替わりで多くの地域の人がボランティアで関わっていることなど）、②金子さんの有機農業「霜里農場」の見学、③和紙工房の見学、④酒造蔵見学、⑤わたなべ豆腐見学、⑥小川町の歴史と文化に関する講義などである。

ある年、参加者から、「小川町の普通の住民の話が聞きたい」と言われ、「有機農業の里としての小川町」というドミナントストーリーではない、もうひとつのストーリーを聞くことをプログラムに組み込んだ。それが、小川町の大河地区の住民の方々との交流だった。60代～70代くらいの住民の方を紹介していただき、お話を聞いた。定年まで近隣の都市で働き、定年後は畑をやっていること、実は



NPO生活工房「つばさ・游」のコミュニティカフェ「ベリカフェ」

奥様がそれまでずっと畑を守っていたこと、畑といっても自給自足的であり、集落の中でお互い交換しあっていること、自給自足的であるから有機農業と言わなくても農業は使わないこと、山が荒れていること、後継者がいないこと、集落のお寺の話や、自分たちで大河地区の歴史と文化の勉強会をしていること、など、お話は尽きなかった。そしてどのお話も、小川町と住民の方の深いつながり、生活の様子を伝えるものだった。

持続可能な地域とは何であるか、私たちの思いこみや狭い視野を少し広げていただくことができたと思う。

参加者の学び

各回の報告書から参加者の言葉を整理してみると、次のようなキーワードが出て来た。

●**地域の人同士のつながり（信頼関係）、人間関係への農業からの示唆（有機的関係）、価値観・ビジョンの共有**
何をおいても、人と人との信頼関係があるところに地域が成り立っているということに加え、小川町の場合には、有機農業における「有機的な関係」というものが人と自然の関係だけではなく、人と人との関係においても「お互いに影響を及ぼし合う密接な関係」として考え方の基盤になっているということである。

●価値観の転換

参加者の学びとして顕著だったのは、農業自体を知ること、さらに有機農業という哲学を持った農業を知ること、自分の生活の根底にある価値観をゆさぶられる経験をしているということである。消費が主体の生活から生産が主体の生活という新しい価値に出会った人が多かった。

●新しいことへ開かれている

小川町は、街道沿いの町場という性格から、昔から新しいものや人がどんどん入ってきて混ざり合い、変化してきた。その風土が今も多くの人を外から受け入れているということにつながっているのではないか。

●歴史性

新しいものが入ってくることは、決して歴史性を薄める要素ではなく、むしろその逆であるということも学びのひとつだった。

●キーパーソン（結節点的人物）

まちづくりには、人と人をつないだり、地域のリソース同士をつなげたりするキーパーソンの存在が重要で、小川町でも前述の高橋優子さんがその役割を担っている。



大河地区の皆さんとの集合写真

●まちづくりの多様性

しかし一人が頑張っているのではなく、さまざまな人が、さまざまな形で小川町をよくしていこうと取り組んでいることもまた印象的であった。

●二面性：新住民と旧住民

二面性という言葉は複数の意味で使われている。ひとつは、人と人とのつながりがある一方で、地域特有の「新住民」と昔ながらの「旧住民」という呼び分けは、新しいものを受け入れる風土のある小川町でも、よそから来た住民を疎外するような意味合いの言葉として使われており、またそのような住み分けの存在もあるということが感じられた。参加者にとって、地域の重層性はなかなか理解しにくいものであった。

●二面性：農業自体のむずかしさ

もうひとつの二面性は農業である。有機農業のすばらしさがある一方で、私たちの食卓を満たしてくれる「普通の農業」の存在もまた同時に感じる事となる。有機農業は手間のかかる農業だから、それだけでは生活がなりたてにくい。生産者も消費者も「食べていく」ための農業もまた、今は必要だということ。どちらも否定しない立場から、農業生産や消費のあり方を問い直すことの大切さも学んだ。

おわりに

合宿では、本当に多くの小川町の方々が快く協力してくださった。それもまた、地域の力であり、地域の教育力の高さを示すことであろう。持続可能な社会は、それ自体が学び続ける力を持っている社会であり、学び続けるとは、変化し続けることにほかならない。小川町で3.11以降、エネルギー自給への取り組みが一層盛んになった。そういう小川町の姿から、経験から何を学び行動するか、という学びの本質が見えてくる。

上條直美（かみじょう・なおみ） フェリス女学院大学ボランティアセンターコーディネーター。立教大学大学院異文化コミュニケーション研究科特任教授などを経て2014年より現職。ESD研究所所員。NPO法人開発教育協会(DEAR)副代表理事。専門は、開発教育、社会教育。